

目が覚めたら男になっ
ていて個性のある日本
にいた

Re.

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

極普通の受験生である私はいつも通りのんびりダラダラと漫画を読みながら大学受験に向けて頑張っていた(?)

しかし、目が覚めたらそこは違う世界

「……………どうということ!?!」

そして元から無かった胸は絶壁に「男になった!?!」

高校生の身長は小学生程に「縮んだ!?!」

拳句の果てには街を歩く異形の人間

そして、現在の兄だという人間が付けたテレビに映ったのは……………

【平和の象徴　　オールマイト】

はい！ヒロアカの世界ですね、こんにちは!!!

から始まる異世界ファンタジーストーリー（シリアスもあるよ）
中学編から始まるぞ！

目次

性別転換したリアルコナンくんになった ようでした	1
友達100人できるかな	6

性別転換したリアルコナンくんになったようでした

―――声が聞こえる

「お

「はやく

「おき、ろ

「おーい…起きろ、朝だぞ明（あきら）」
意識が覚醒した

「…おはよ…兄ちゃん」

「ああ、おはよう。顔洗ってからリビングにおいで？入学式なんだから急ぐんだよ」
実の兄ながら非常に整った顔をしていると常々思う

その遺伝子を受け継いだので自分の容姿がこの世界でも見劣りしないほど良いものであるのはわかっている

「…ん」

そう、目の前に居るのが私の兄「四宮 冬弥（とうや）」

いや俺の兄だ

俺は「四宮 明」

今日で中学1年生になる

そして、「転生者」だ。

だが、俺の場合は車に轢かれそうな猫を守ってトラックに轢かれたとか、神様がやって来て「ごめんね、殺しちゃった☆次の人生行つてらっしゃい！」とかではなかった。単純に目が覚めたら少年になっていただけだった。

病室にやつて来た兄が言うことには母と父と車に乗っていた俺は事故にあい、母と父は死亡。俺は運良く生き残つたらしい

俺は事故のショックで記憶を失つたことになっている。なんという可哀想な子供だろうか

目が覚めたら異世界。とか何処のテンプレノベルだ？

元は女だったが、男っぽい性格だとよく言われていたし、性別に対しての興味もない

のでそこについてはなんの問題もない

「!やば!入学式から遅刻はない!」

急いで顔を洗ってリビングに行くとき香ばしいトーストが用意してあった

「いただきますっ!」

「はい、どうぞ。明、僕は今日仕事で遅くなるから帰ったら冷蔵庫の中のご飯食べてから寝ててね」

「ん、わかっは、きほつけへね」

「…もう…口に入れたまま喋らない」

呆れ笑いで新聞を読んでいる兄が焼けばただのフレンチトーストですらイタリアン料理かと勘違いする程である

これが才能か…と世間の現実を知ったところで水で喉を潤した

父と母が居なくても寂しい思いはしたことが無いし、不便なことも無い

俺の為に働きながら面倒見てくれて家事までしてくれる兄には頭が上がらない

全ては兄のお陰で、感謝しているし尊敬している

「兄貴……いつも、さんきゅ。行ってきます」

柄にもなく気恥ずかしいことを口にして逃げるように扉から飛び出した
いぎ、入学式！つてね

「……あーあ、「兄ちゃん」は卒業かあ。「兄貴」でも明が可愛いのにには変わりないんだけど
ね」

閉まったドアの前で頬を緩ませて綺麗に笑う冬弥は体の向きを変えてリビングに
戻った

右手にある父と母の遺影に笑いかける

「明は、貴方達が居なくても立派に育っているよ」

そして、こちらを見つめる写真立てを勢いよく倒した

——
バリン！

「……………ありがとうございます、父さん。」

5 性別転換したリアルコナンくんになったようでした

「簡単に死んでくれて」

友達100人できるかな

名部中学校 「入学式」

と書かれた看板を潜り抜け体育館に向かう

今日は体育館でセレモニーを行ったあと、各自の教室に移動して軽い説明の後解散になる

「…ふう、長かった〜」

校長先生、PTA会長の長つたらしい式辞も終わり教室に移動する
俺は…1組か。

ガラツと扉を開けると数名がちらほらと席に座っていた

黒板を見ると名前と席が記されている

「うわ、ラッキー！窓側の1番後ろじゃん」

つい声に出すと窓際の1番前の男子が笑った

「まじかよ、羨まし〜。変わりたいわ」

「まあ1番前はつらいね」

「そうそう。寝てたら即バレ！あ、俺は中田類。よろしく〜」

「俺は四宮明。よろしく中田」

軽い挨拶を交わし席に着く

左にはグラウンドが見える。いい眺めじゃん

窓を開けると心地よい風邪が吹いてきて、瞼が下りる

先生はどうせまだだろうし、軽く眠るか

うつ伏せになっていると大分教室が賑わい始めた

ほどよく明るい子がいるみたいだ

隣から聞こえた椅子を引く音につられてうつ伏せの頭を上げて右を見る

パチツと紫の瞳と目が合った

「…おはよ?」

「……………つーく、おはよう」

謎の挨拶に何かが目の前の少年のツボにハマったらしく笑いを堪えながらも挨拶してくれた

「笑いすぎな。改めまして、四宮明です。隣の席だし仲良くしてくれ」

「つ、ごめん。心操人使。…よろしく」

知ってる名前だ。確か雄英体育祭に出てきたキャラである

だが、今はただの人間。キャラ呼びは失礼なので心操と呼ばせてもらおう

先生が来て軽いガイドダンスが始まる

あつさりとは話は終わり、12時になったら各自解散でそれまではみんな仲良くなるのに使えよ

とあつさりと職員室に帰って行った先生の言葉通り

教室のあちらこちらで自己紹介が起きている

俺は窓際の端なので前の女の子と軽く話していたが、心操は周りや隣の人から集中攻撃を受けていた

「心操人使、よろしく」

拙い挨拶が聞こえてきて、つい笑ったら前の女の子は不思議そうにしていた

たどたどしく返事をしていた心操はある質問で固まった

「なあ、お前の個性なに？俺は炎！」

黙り込む彼を不思議に思ったのか、もう一度詰め寄った

「…洗脳。問いかけに返事をした人を操れる」

ついつい女の子を蔑ろにして右を見た

有能で使い勝手のいい個性だ。不意打ちには死ぬほど強い

個性の価値は計り知れない

「…え、やばっ！」

「洗脳とか、まじで敵向きの個性じゃん」

「うわ、やりたい放題だろ」

口々とする言葉に明は軽いため息をついた

やっぱりただの中学生にはその考えしかでないか

「…俺は、ヒーロー志望だから…そんなことしない」

暗い表情ながらもしつかりとそう宣言した彼に口角が上がった

うん、コイツのこと好きだわ。気に入った

「いいね、なれるよヒーロー。…心操みたいなのがなるべきものだと思うよ英雄は」

横から口を挟んだ俺を見て心操を取り囲んでいた男子達は目を見開いた

「いや、でもさヒーロー向きの個性じゃなくない？」

「聞くけど、ヒーロー向きの個性ってなんなの？強い個性？戦闘向けの強化系？敵には強い個性持ちなんていくらでもある。でも、そいつらがなんでヒーローじゃなくて敵って呼ばれるんだと思う？」

人を傷つけるからだよ

「ヒーローになるために必要なのは力だ。でも大事なのはそれじゃないんじゃない？多

分それはオールライトが1番持つてるものだと思うよ。『人を救いたっていう心』だろ」

「だからなれるよヒーロー。心操は持つてるから」

職業としてのヒーローじゃなくてホントの英雄に

「うわ、くさくてかつこいいセリフはいてんなよ、四宮！」

ちようどいいタイミングで中田が茶化してくる

「うるせえよ」

「あーもう12時だぜー！はい、各自解散！」

静まりかえっていた教室は中田の声で賑やかさを取り戻し男子達はそそくさと荷物を用意して教室を後にした

「四宮、俺って気が利くと思わない？褒めてくれてもいいぜ？」

「…席は変わんねえから」

「さすがにそれは諦めてるって！」

どうでもいい会話をしかけてくる中田は無視して、貰ったプリントを荷物に詰め込む

「…なあ」
肩に手を置いた心操に返事するように首から上を横に向ける

「ほんとに…なれると思うか。「洗脳」で」

手に真新しいカバンを持って去り際に背中をバシツと叩く

「!？」

「…なれるじゃなくて、なるんじゃないの？また明日」

後ろから聞こえてくる「なるさ！…四宮また明日！」

初めて聞いた大きな声に手を振って廊下を歩く

「うん、良い友達が出来そうだって兄貴に言わなきゃね」

黒板を見ると窓際から2つ目の席だった

隣の席は男で、うつ伏せになって寝ている

日光に照らされて髪は金色に見えたが色素が薄いだけで茶色っぽいのに気づいた椅子を引いて何となく左を見ると目が合った

その翠に何となく視線が逸らせなくて

整った顔にモテるんだろうなとぼーっと考えた
そこから出る寝ぼけた挨拶について笑ってしまった訳だが

個性の質問。「洗脳」という個性はこういう時に不便だ

聞かれたことを答えることがこんなに嫌なのは何故だろう

「敵向き」「怖い」知ってるよ。そんなの。

それでもヒーローになりたいんだよって言える勇氣はないから

ただ下手くそな愛想笑いで話を終わらせれば今日も終わる

はずだったんだが

目を逸らした先に翠の目があって

ついつい口に出していた「俺はヒーロー志望…だから」

口から出てきた言葉に自分が一番驚いた

何よりも驚いたのは四宮が言った言葉だった

「ヒーローになれるよ」

初めて肯定された。

ここが俺のオリジン

これから3年間、腐れ縁とも言える仲間と一緒に雄英に行くことになるのは今の俺は

知らなかつた